

各現場で見る コーディネーターの現状と課題

新居 プレフォーラムの第1部に入りたいと思います。早稲田大学教授で、司会を務めます山西優二から当研究全体の意義やこのプレフォーラムの流れを説明いたします。

山西優二 早稲田大学の山西です。これからの進行についてご説明します。最初に、私たちのこのプロジェクトチームの大きなねらいについてお話して、さらに今日のこのフォーラムの位置づけについて、確認しておきたいと思っています。

◆ 素朴な問いからスタート

今いろいろなところで、コーディネーターという言葉が躍っています。特に多言語・多文化社会、時には多様性ということが求められてくる中で、このコーディネーターとは何だろうということが、私たちのこのプロジェクトチームの一番素朴な問いで、そこからスタートしています。ただこのコーディネーターをテーマに研究を進めていく上で、最初のステップとして現状、さらにはその機能もしくは職能の中で、今どういう課題が見えてきているのか、これをまずしっかり押さえようというのが、前提となります。さらに、ではこのコーディネーターが、それなりの専門性を持っているとするならば、このコーディネーターの持つ専門性とは何だろう。それをどういう視点から、私たちは考えていったらいいのだろうか、というのが2つ目のねらいです。そして最後の3つ目は、その専門性が、もしそれなりに見えてくるならば、コーディネーターを形成していくプロセスとして、どういう学習プログラムをそこで構築



山西優二

していったらいいのか、というところまでも考えてみたいと思っています。研究が動き出して約半年たっていますが、07年度から08年度にかけてこれをやっていこうというのが、私たちのプロジェクトチームですので、その中で、今日の位置づけはまさしくその最初の現状・課題を明らかにするというねらいが中心になります。

そこで本日の第1部は「各現場で見るコーディネーターの現状と課題」をテーマとして、4人の方から事例を報告していただきます。それぞれコーディネーターという名の下で、自分たちがどういう状況にあって、どういう課題を抱えているのかというような点を、まずしっかりと語っていただき、皆さんとそれを共有していただく。さらにはそれを踏まえて、第2部では「多文化社会に求められる人材像とコーディネーターの専門性」と題したディスカッションを4人の報告者に、先ほどお話しいただいた東外大の杉澤さん、特任研究員で「かながわ国際交流財団」の情報サービス課長、小山紳一郎さんのお2人に加わっていただき、改めてコーディネーターの専門性というものをどうとらえたらいいのかを問題提起してもらい考えていきたい。もちろん、その点については今日の話で答えは出るものではなく、今後研究を進めていく中で、徐々にその専門性ということを明らかにしていきたいとは思っています。

また当班では、コーディネーターに関する先行研究を調べて、それを整理しています。その成果は全国フォーラムの段階で報告させていただきますが、同時並行でそういったこともやりながら、現場に即して、どういう研究がどこまで到達しているかということも明らかにしながら、その専門性ということを徐々に絞り込んで、それをプログラム形成というところまで持っていきたいと考えています。

それでは早速第1部の各現場からの報告に入っていきます。日本ボランティアコーディネーター協会運営委員の疋田恵子さんからお願いします。

■ 福祉分野の立場から

疋田恵子 少しだけ自己紹介を。日本ボランティアコーディネーター協会（JVCA）の運営委員という立場で、参加しています。こちらのNPO法人は01年の8月に発足しました。さまざまな分野の現場で、自発的な活動をしている人たちの取り組みをより効果的にキチンと力を高めていけるようにしていかなければと、自主的に集まって組織した団体です。

さて、今日はコーディネーターがテーマですが、私どもの職業としてのボランティアコーディネーターを定義したものがああります。

「市民のボランティアな活動を支援し、その実際の活動においてボランティアならではの力を発揮できるよう、市民と市民または組織をつないだり、組織内での調整を行うスタッフ」

このように定義づけております。そういう意味では、今回福祉の現場の事例で発題しますが、私どもは、ボランティアコーディネーターと名乗っていない方でも、共通の機能を持って役割を果たしている人全員をボランティアコーディネーターと勝手に呼ぶくらいコーディネーターを広くとらえている、と理解していただければと考えております。

JVCA 運営委員という立場は、私が職業としてやっているポジションではなく、日ごろの仕事の現場は、東京都の杉並区社会福祉協議会のボランティアセンターです。そんなことから事例や現場に沿った話ということで、杉並のボランティアセンターでの話が多くなると思います。

いろいろな福祉の課題、暮らしの課題や食事の問題でも、1人、また家族でもやっていけない課題が出たときに、よく窓口に相談があります。では、食事を自分で作れないから作りに来てくれる人はいないか、という相談があったときに、作ってくれる人がいるか、と探し始めるかという、ボランティアコーディネーターはそういう仕事ではありません。なぜその方が作れない状態にあるのか、その周辺の方々でできる、ほかの手段でかかわれる人はいないのだろうか。それから、主に福祉の課題というのは今後もっと毎日継続的に必要になるものが増えてくると思いますので、ボランティアというかわりではなくて、サービスや福祉的な制度、行政でやっているようなものなど、そういったものを利用することができないのだろうか。そういったことを、まずすべてチェックするようにしております。

と言いますが、お見えになった方自身がそういった情報を知らないがために、ずっと苦労されて、たまたまボランティアということを知ったので窓口に相談に来たという場合もあるからです。情報がないために、暮らしの課題を克服できない方もいますので、「地域資源」、こういう表現をしますけれども、そういった福祉サービスなどがどうなっているのかということを確認し、情報提供しながら、



正田恵子

ボランティアにしか協力できない部分というところを探し出しながら対応します。また緊急性が高いかどうかということもかんがみて、探し方を変えていくというのが現状です。

◆ 速い制度変化を現場にどうフィードバックするか

課題ですが、福祉の現場でボランティア活動に関連して大きく感じることは、制度の変化が速く、活動に求められる変化も速いということです。

10～40年前は、福祉制度の狭間で制度が対応（カバー）できないことをボランティアで補う形で活動が行われていたといえます。福祉は、行政などによって保障されるべき部分が多かったように思います。例えば、移動手段ですが、今でこそ公共交通施設にもエレベーターや、いろいろなハード面も整備されてきていますが、当時は、外出することができずに家にこもっている方が多かったです。高齢者の問題でも、今でこそ民間事業者が、弁当1個でも嫌な顔をせずに入れてくれたりするデリバリーサービスも増えましたが、ほんの15年ぐらい前は1食だけでは届けてくれるというサービスがなかった。そういった身近な問題は近隣の住民の人たちにも理解を得やすく、お弁当を作って届けてあげようと、ほんの10年から20年ぐらい前はボランティアが支えてきたという実態がありました。

当時の福祉制度では、事業者になれるのは、社会福祉法人格などを持った組織などに限定されていましたが、それが5～10年前に大きく変わりました。ご存じのようにNPO法の施行で、法人格を有した団体も増えてきて、事業者となる母体が変わってきました。

また、介護保険や自立支援法が施行されていますが、福祉サービスは行政が保障するべきという考えから民間が支えるもの、と意識も変わってきました。民間事業者がどんどん参入して、福祉というものもサービスという形で取り込まれています。これはここ10年ぐらいで、ボランティア活動も暮らしの問題について行政に対して働きかけをして保障してもらえよう



運動してきた活動スタイルから、民間同士のサービスとして、いろいろなこまやかなものをサービスとして成り立つようにと変化してきたため、取り組み方を変えざるを得なくなってきました。

今は、介護保険サービスを利用するために1割自己負担を払えるかどうかや、そういったご家庭の経済的な事情も含めた上で、制度的な変化をボランティアコーディネーターが把握していないと、相談に来られた方に適切な情報を提供できないという現状があります。特に今は、全国一律ではなく、自治体ごとにサービスが変わってきていますので、ボランティアコーディネーターも転職したり、別の地域から来たときには、そういった現状や地域資源の情報把握から始めていかないと、福祉の流れに遅れてしまうというところが、課題としては感じています。

今回、国際交流のフィールドでのテーマということですので、実際にどういった相談があるのかということをお話しします。現在、日本語も話せる外国生まれの人が、年をとられてから特別養護老人ホームなどに入所しているケースがあります。そして認知症の症状が出てきたときに、母語しか話せなくなってしまう、という方がいます。こうした場合に、福祉施設の職員がその国の言葉を理解できるか、あるいは、そういうことに施設があらかじめ備えた体制を取っているかというところ、そうでないところが大半です。ただ、その施設の中で暮らすということになると、その方のこれまでの人生や背景、暮らしてきた経験を理解しながら、言葉でも日本語以外で話したいという、その気持ちを酌んでボランティアを探そうとするような取り組みを福祉施設の職員がしてくれるかが大切だと思います。現場では、お一人お一人の母語で会話をしたいという気持ちを酌み取れる、感じ取れる感覚というのを、いつでもボランティアコーディネーターは持ち合わせていないといけないと思っています。

山西 最初に福祉の方から入っていただきましたけど、いかがでしょうか。私も神奈川県逗子市で社会福祉協議会にかかわって、もう8年ぐらいたっています。福祉をどう考えるかということからよく話をしますが、福祉を「ふだんのくらしのしあわせ」というとらえ方を、逗子市ではしています。そうとらえると、これはいろいろなものが全部入り込んでいきますから、地域の福祉を語っていくと、今日出されたいろいろな問題が全部福祉ということとつながっていく、と私も改めて感じているところです。次は、やはり杉並区ですが、教育委員会指定学校教育コーディネーターの宮村育代さんです。

■ 学校教育の現場から

宮村育代 私の現在の名刺には、杉並区教育委員会指定学校教育コーディネーターという名称が書いてあります。住所は、自宅の連絡先などが書かれています。ということで、杉並区の行政職員ではありません。個人で杉並区教育委員会の業務委託を受けて、活動している形になっております。経験は2年半です。日々試行錯誤をしており、失敗ばかりしていて、先輩コーディネーターからいろいろなことを学ばせていただいています。皆さん、今日はぜひ、私のアドバイザーになった形で聞いていただいて、私の事例などに対してコメントやアドバイスなどをいただければと思います。



宮村育代

さて、今日の報告の内容ですが、学校教育コーディネーターの仕組み、現状、そして成果と課題を報告させていただきます。

まず、仕組みについてです。現在わが国においては、教育改革がものすごいスピードで進められています。学校・家庭・地域、この連携、協働によって教育力を高めていこう、というような仕組みづくりがさまざまところで進められているかと思いますが、今日は現在私が活動をさせていただいております杉並区のケースをご紹介します。

◆ 学校教育コーディネーターの役割

杉並区の学校教育コーディネーター制度というのは、02年度にできまして、現在15人のコーディネーターが個人やNPOの代表として杉並区から業務委託を受け、活動をしております。1人が1校から6校の学校を担当しながら活動を進めています。ちなみに私は小学校1校と中学校1校の2校を担当しております。コーディネーター15人、それぞれ得意分野がありまして、この15人のネットワークを使って、学校の要望に対応したり、また活動を広げていったりする仕組みになっております。

仕事の内容は、基本的には学校の求める人材などを紹介するというような活動が主なものです。現在私が拠点校として担当している小学校では、国際理解、福祉、情報、環境、スポーツ、表現活動、学校を飾る、道徳公開講座、大学との連携など、あらゆる分野のところでかかわっております。最初の学校からの要望は、



演劇クラブの子どもたちが区総合文化祭で発表したいので、指導者を探してくれないか、という要望でした。そして、その演劇クラブでの活動は、年々広がってきております。3年目となった07年では、クラブだけではなく総合学習の時間にも専門家の方に入っていていただきます。3年生から6年生を対象

に総合学習の中で演劇的なアプローチを取り入れた「ことば」の授業も始めました。

また、国際理解の方では、小学校はやはり英語活動の要望が多いのですが、ネイティブの先生に来ていただいて、ダイナミックな活動をしてもらったり、また教科の発展学習として、例えばモンゴルの文化を知ろうなど、そういうような活動にもかかわっております。また、入り口壁面スペースを飾ってくれる人はいないか、という要望を受けて、デザイン専門学校卒業生を紹介したこともありました。

さらに、道徳公開講座においては、特に父親の参加を促したいとのことで講師紹介の依頼も受けました。日本で子育てをしているフィンランド人の父親、また元PTA会長だった母親、そして父親である教員をパネリストとしたパネルディスカッションを企画し、家族カウンセリングのプロの方にコーディネートしてもらおう、というような企画を立てたりもしました。

中学校では、推進校という位置づけでかかわっていますが、職場体験などのキャリア教育や福祉体験、国際交流、道徳、伝統芸能などにかかわっております。キャリア教育は、職場体験のために生徒が30カ所ぐらいに分かれて行ったりするので、そちらの事業所の開拓にもかかわりました。職場体験の事前授業として、社会の第一線で活躍されている方々に来ていただき、マナーについて指導してもらったり、職業・仕事をテーマに生徒たちと交流を持ってもらうということもしています。また福祉の分野では、夏休みに生徒がボランティア体験に行く際の事業所探しや福祉交流会のゲストティーチャーのコーディネートなどもしています。

◆ 異質なものをつなげ、新しいものを生み出す

それでは、次にどのようにコーディネートをしているのかということをお話しさせていただきます。まず社会資源を蓄積する。それから学校、先生のニーズを把握する。そしてマッチング、そして授業のプログラムを作る、授業を行う、授業の評価をする。それから次へ生かしていく、というような流れです。一見スムーズにゆく感じに思えるかもしれませんが、実はこの一つ一つのプロセスの中で、私はたくさんの方向の異なっているベクトルに出会います。このベクトルの違いのひとつが、私のズレだったりもしますが、それを私自身のズレも含めて、ひとつの目標、ねらいに向かって方向を定めます。その際に私が心掛けていることは、それぞれの立場のいいところを明確にしていくということです。

それではいったい私は何をしているのでしょうか。異質性をつなげて、新たなものを生み出していく、そういうことをやっているのではないかと考えております。AとAではないもの、その間にズレ、矛盾、対立、壁が存在していて、このズレや矛盾を生かしながら、新しい発展や新しい可能性へとつなげていく。難しい言葉でインキュベーション機能、孵化、卵がかえるような、そのような機能を担っているのではないかと考えております。

まとめに入ります。成果としては、人、組織の成長、活性化を促すことが挙げられるのではないかと思います。これは具体的に、子どもの学びを豊かにしたり、子どもの夢、可能性を広げていくことだと思います。これは子どもに限らず、教師やゲストティーチャーとして来ていただいた方、また地域の方々の可能性をも広げているのではないかと考えております。また、信頼性を生み出すこと、ソーシャルキャピタルと言ったりしますが、信頼性を生み出していったり、教育プログラムを協働開発していくというような成果もあるのではないかと考えております。

◆ 教師との関係など4つの課題

課題といたしましては、4つ挙げたいと思います。

まず、やはり教師、学校との関係性が課題として挙げられます。先生の仕事とコーディネーターの仕事の境界がとてもあいまいで、とても難しい。また、最近コミュニティースクール化の動きがあり、学校に地域支援本部などが立ち上がってきていますが、そちらの地域との関係性の課題も今後出てくるのではないかと考えます。

2番目は、動的コーディネート機能。学校や地域の協働度や、自立度に機能を

対応させていかなければならないというところが、とても難しいことだと感じております。

3番目に、不確実性、あいまい性。制度の方向性も含め、とても不確実な状況があります。

4番目に、コーディネート機能を担う人は誰なのかという課題です。教員なのか、コミュニティスクールのメンバーなのか、NPOなのか、もしくは専門コーディネーターが適当なのか、というような課題です。

最後になりましたが、皆さんに1枚の写真をお見せして終わりにしたいと思います。この写真は、フィンランド・ヘルシンキにある、「3人の鍛冶屋」という銅像です。これはフィン



ランドの民衆が大切にしている「協働」の象徴だそうです。フィンランドの学校を訪問した際に撮ってきたものです。この銅像を見ながらいつも考えます。「協働」、それはそれぞれの異なる立場の人々が、それぞれの立場を生かし合いながら、ひとつの目的に向かって何かをつくり出していく。コーディネーターは、いかにこのような場を設定し、いかに効率的にそれぞれの立場を生かし合えるように働きかけ、そしていかに意義あるものをつくり出していけるか、このような役割を担っているのではないかと考えております。

山西 非常に元気なプレゼンテーションをいただきました。課題の最後に改めて協働の場を設定し、効率的にお互いの立場を生かしていくという、ひとつの視点を出していただいています。聞きたいことがたくさん浮かび上がってきているかと思えます。皆さんも、質問の準備もよろしく願いいたします。それでは続いて東京都の武蔵野市国際交流協会（MIA）日本語学習支援コーディネーターの宮崎妙子さんにお願いします。

■ 日本語学習支援の活動から

◆ 市民活動としての日本語教室

宮崎妙子 本職は、海外からの留学生と日々かかわる日本語教師です。一方で、MIAの日本語学習支援コーディネーターをしています。MIAは、日本語学習



宮崎妙子

支援コーディネーター職を03年度に設置しました。その目的は、ますます多様化するであろう学習者ニーズに柔軟に対応するためでした。コーディネーターは私ともう1人の計2人で動いています。私たちは、設置以来、毎年契約を交わしながら、07年で5年目を迎えました。

コーディネーターの職務は、MIA主催の日本語コースに関するコーディネート全般と契約書に書かれています。日本語コースというのは4つあり、その4つのコースの総称を日本語教室と呼んでおりますが、MIAでは日本語教室を市民活動ととらえています。それは、市民が問題意識を共有し、議論しながら解決の道筋を探っていく活動、それぞれの思いを共有して形にしていく活動と考えているからです。

この4つのコースは、曜日と時間帯が異なり、1年を3期に分けて開催されています。構成員は「参加者」と呼ばれるいわゆる学習者、「日本語交流員」と名付けられたMIAの会員で、コースでは日本語交流員を「学習スタッフ」と呼んでいます。保育付きのコースがありますので、ここでは「保育スタッフ」、そしてMIAの事務局、このような陣容でやっています。

今、進行中のコースは07年度の2期に当たりますが、参加者総数60人。15歳から70歳と年齢層は広く、参加者の母語の言語数からいえば10言語は下りません。日本語交流員は、学習スタッフとマンツーマンという形でかわる人合わせて50人ほどです。保育スタッフが10人で、現在お子さんは11人お預かりしています。

◆ 日本語学習支援コーディネーターの3つの役割

では、実際に私たちがしている日本語学習支援コーディネーターの仕事はどんなものか。次の3つが考えられます。問題意識の共有化、活動の円滑化、そしてネットワークの構築です。

問題意識の共有を図るために、コーディネーター会議というのがあります。これはMIA事務局とコーディネーターが集まり、基本的な理念を確認しながら、新たに見えてきた問題、課題に対応し、プログラムに落とししていくものです。コーススタッフによるコースミーティングはその縮小版といえますが、コースに立脚した問題、課題、それをコースのプログラムに落とししていきます。コーディネーター会議もコースミーティングも定期的に関われますが、必要に応じていつで

も招集がかけられるというものです。以上、2つのミーティング、会議というものは公的なものですが、非公式の問題意識共有の場というのがあります。それは日本語交流員たちのおしゃべりの場です。日本語交流員たちがおしゃべりを楽しむ中で、意識化されていなかった問題、課題が浮き彫りにされてくる。そして、おしゃべりの中で問題解決が講じられる。それが、コースミーティングやコーディネーター会議にかけられることにより、プログラムやシステムに反映され、運営面でも変更がずいぶん行われてきました。「おしゃべり」は捨てたものではないと確信しています。

関係者の意識の共有を図るために、日本語交流員養成講座とステップアップ講座というものもあります。企画運営はMIA事務局がやっておりますが、私たちコーディネーターはこの講座の一部を担い、ワークショップ形式で、参加型学習の手法というのをお聞きになったことがおありでしょうか、そういうものをみんなできながら一緒に考える場をつくっています。

次に、活動の円滑化ですが、私たちの活動は主に日本語コースの運営です。シラバスの作成や参加者のレベル分け、日本語交流員の確保、教材選びなどがありますが、ここでそのひとつであるコースプログラムの企画についてお話しします。まず、コースプログラムの企画として、MIA内部での活動と、外部との交流というものを考えています。学習活動のときは、日本語のレベル別にグループ分けがされていますが、グループを取り払った「おしゃべりと情報交換の場」も設け、日本人のスタッフと参加者と呼ばれる学習者が、平たい人間関係になって、一緒に活動しています。日本語学習支援というと、どうしても教える側と教わる側という役割が固定されがちです。それを取り払うために、このような活動、アクティビティーといっていますが、これをします。こういうことをしますと固定した関係がほぐれてきて、新たな次元の関係に結び直すことができるように思います。地域の消防署の協力を得て、初期消火、110番通報というような体験もします。日本語学習にしても、人間関係づくりにしても、この緊急時の対応にしても、すべてが地域で暮らしていくために必要なものだと考えています。以上はMIA内部での活動です。

次に、外部との交流ですが、コースが丸ごと地域の小学校や中学校に行って交流をする「日本語教室丸ごとプログラム」と命名されたプログラムがあります。参加者が自らを発信する場と私たちはとらえています。MIA外部との交流は、参加者の社会参加を促すものですが、このような活動は私たちだけではできません。地域との連携が必要になってきます。そのためのネットワークづくりも、私

たちコーディネーターの仕事と考えています。

最後に課題として3つ挙げたいと思います。まず、参加者、2つ目は次世代の日本語学習支援コーディネーター、3つ目は高いコミュニケーション能力に関するものです。1つ目と2つ目は組織上の課題、3つ目はどちらかといえば個人的な課題です。

最初の参加者についての課題ですが、成人、学齢期の子どもたち、乳幼児と3つに分けました。

◆ 仲間としてともにプログラムをつくる

まず成人に関してですが、今、顕著な傾向として、日本語レベルの高い方たちの参加が非常に増えています。日本語教室というものに行政が取り組むのは、地域に暮らすための最低限必要な日本語を学習する場を自治体が外国籍市民に保障するということだったと聞いています。最低限必要なというのは、私たちの考えでは初級レベルと考えていますが、今は、その初級レベルを超えている、あるいは初級レベルを優に超えて上級に近い方たちの参加が、コースの半数を占めています。これはいったいどういう現象なのか、この方たちと一緒に私たちはどんなプログラムを作っていけるのか、それが大きな課題です。といいますのも、この方たちはかなりの程度まで日本語でコミュニケーションができます。ということは、この方たちと私たちは日本語を使いながら、ともに市民として多文化共生社会を考えていく、仲間としてプログラムを作っていくことができるのではないかと。そのプログラム作りが大きな課題です。

次に、私たちのコースにも学齢期の子どもさんたちが何人か入ってきています。主に中学生ですが、このようなお子さんの場合はMIAだけでは対処できません。学校や家庭、それから地域、その方たちとのネットワークづくりというのが、やはり大きな課題になります。

◆ 保育室で見えてくる小さな多文化社会

そして、先ほどお話ししましたが、保育付きのコースがあります。お子さんたちの中には、日本人として育てていくことが期待されている子どももいれば、一時的に日本にいる子どももいます。1週間に2時間、子どもたちが小さな保育室に集まるのですが、ここには確かに共同体が生まれているのです。保育室で見た光景で印象的な場面がありました。女の子が泣いていて、ドアの向こうの学習中のお母さんと呼んでいる。男の子たちが、あっちへ行っちゃだめなんだよと言っ



ているんです。言葉では言っていない。言葉はないんです。言葉ではなくて通じることがあります。そして保育スタッフの誰かが、必ずいつも日本語で子どもたちに声をかけている。その日本語は、保育スタッフの優しさとともに、子どもたちの体の中に吸収されていくような気がします。保育室にいと、なぜかそんな気がします。多文化

が共生していると思えてしまいます。小さな子どもたちの世界に共生を考えるヒントが日常的に起きているように思います。多文化共生社会の芽というのは、保育室にあるのではないかと感じてしまうくらいの空気が流れています。そこで私の課題といたしますのは、このお子さんたちの保育室が、そのような多文化共生社会の芽であるならば、もっといい方法、もっといい形があるのではないかと。それをどのようにして私たちは手に入れることができるのか、考え出せるのか、それが大きな課題です。この成人、子ども、幼児のそれぞれの課題、これはすべてやはりネットワークが必要になりますので、ネットワークづくりというのも大きな課題になってくると思います。

次に、次世代の日本語学習支援コーディネーターということでお話しします。私たちは日本語学習支援を市民活動として位置づけております。市民活動というのは、先ほどもお話ししましたように、議論し、問題意識を共有し、その解決の道筋をまた話し合いながら進めていく、とても時間と手間ひまがかかる活動です。この時間と手間ひまのかかる活動を、私たち2人のコーディネーターは仕事を持っていて、その傍らにしているのですが、そこには、限度と限界があります。日本語学習支援コーディネーターを引き受けてくださる方には、時間とエネルギーが必要ですが、そのような方を見つけなければなりません。これは喫緊の課題です。

そして3つ目ですが、これは先ほど言いましたように個人的な課題でもあります。それはコミュニケーション能力を高めること。ここでコミュニケーション能力というのは、明解な言語を使って理路整然と語るということではなく、たどたどしい日本語、あるいは非言語の内に込められたメッセージを感じ取り、受け取

り、それに応えることができるというコミュニケーション能力です。このようなものを、私自身が課題として高めなければいけないと思っています。

以上、日本語学習支援コーディネーターの仕事と課題についてお話ししました。これまでにはいつも時間に追われて、考えることもなく走ってきましたが、今回立ち止まって考えるきっかけをいただきました。大変ありがたく思っています。

山西 日本語教室、日本語教育の場もさまざまな動きがありますので、いろいろなことを考える素材を提供していただいていたと思います。最後になりますが、名古屋国際センター交流協力課の丹下厚史さんをお願いします。

■ 国際交流団体の立場から

丹下厚史 私は、地域の国際交流協会の職員で、勤めて20年以上が過ぎています。名古屋国際センターというのは、名古屋市がつくった外郭団体です。名古屋市役所が資金を出して、財団法人をつくり、それで地域の国際交流、国際協力の推進をしています。設立当初は、外国人に日本の情報を提供しましょう、日本人には海外の情報を提供しましょう、それから日本人と外国人の出会いの場を提供しましょうという、3つの目的で84年に設立されました。

◆ 時代とともに役割に変化

でも時代の流れとともに社会状況が変わってきています。例えば、外国人と日本人の出会いの場というのは、私たちがつくるのではなく、既に日常にあります。特に名古屋ですとトヨタの関係もありますから、日系ブラジル人をはじめ非常に在住外国人が多い。私も、05年までマンションに住んでおりましたが、マンション64世帯の中で15世帯ぐらいは外国人世帯でした。

それで、私たちのセンターの新しい使命と役割ということで、「地域における多文化共生の促進」、それから「地球市民としての意識の醸成と活動の促進」の2つの柱を掲げ、またそれを進めるに当たっては、関係機関・NGO・市民活動との連携と、情報発信機能の充実に努めていきましょうということで、3年ほど前に新たな経営基本方針としてつくったということです。言葉にすると非常に硬い形になって



丹下厚史

しまいが。

今日の発表では、先ほど宮崎さんもおっしゃっていた日本語教室などは、名古屋でも展開していますが、私からは特に国際理解教育の観点から説明をさせていただきます。

名古屋で毎年2月に行っている「国際理解教育セミナー in なごや」というイベントがあります。主催をしているのは次の団体です（資料 p. 112、113 参照）。

- ①愛知県国際交流協会、県の協会です。
- ②名古屋国際センター、私が所属している市の協会。
- ③国際協力機構（JICA）中部。JICAは全国にありますが、中部の支部が名古屋にあり、国レベルの機関といえます。
- ④地元でNGOの40団体ぐらいが加盟している名古屋NGOセンター。NGOの人たちと連携して、お互いに情報提供したり、スキルアップなどを行っている団体です。
- ⑤ひとつの民間教育団体、NGOなのですが、NIED・国際理解教育センター。

この5団体が協働して行っているものです。

このセミナーの目的は3つあります。「国際理解教育との出会いの場づくり」、初め的一步からステップアップにつながる「各団体のプログラムの紹介」、そして「地域の担い手の育成」です。

◆ 参加型手法で時間をかけて合意形成

以前から5つの団体は、それぞれが国際理解教育なり、またNGOセンターでは開発教育というような言葉を使いながら、活動をしてはいたわけですが、それを協働してやっていこうという形になったわけです。

このセミナーの特徴は、地域の国際理解協力の推進にかかわるセクターが、企画から運営まで協働で実施しようということです。協働といいながら、行政系の団体はお金だけを出して、実質運営はNGOなどが担うパターンがありますが、そういうことではなく、各セクターが専任の担当者を置いて、内容決定の過程では参加型手法を用い、多数決で決めることはしない非常に時間のかかる手法で行います。例えばミーティングは、毎月やっていますが、普通、行政系の会議だとせいぜい2時間、3時間ですが、だいたい1日かけてやることも多い。最低でも半日、それから食事を取りながらも話をしたりします。特に参加型手法を用いるが故に、はかどらないミーティングの連続というのは、国際理解教育の本当に大きなハードルですが、このプロセスをとっても大事にしています。形や名だけ

の参加はないということです。お互いの強みを生かし、弱みを分け合いながら、このセミナーをやっています。

◆ それぞれの特色を生かした活動

例えば愛知県の国際交流協会は、既存の事業でファシリテーター養成講座を持っています。国際理解教育の現場でその触媒役となる日本人を育成しています。また、県の協会ですから教育委員会はじめ県全域に強いネットワークを持っていますから、県内のいろいろな教育機関のところに入っていきける。

また、私が所属している名古屋国際センターでは、「地球市民教室」という、いろいろな学校・コミュニティーセンター・シルバー世代向けの高年大学などへ、地域在住の外国人を講師として派遣するというプログラムを持っています。今は32カ国・2地域の、115人の留学生や社会人たちが登録しており、年間250件ほど派遣をしています。市内の教育委員会との関係は県と同じ形ですが、例えば、広報力という意味では、国際理解教育のために、名古屋市のテレビ番組を使うこともできます。こうした点は、やはり国際交流協会という、民間でありながら、行政の側面も持っているという点、ダブルの顔を持つという利点があると思います。

JICA 中部ですと、例えば青年海外協力隊のOBがいる。名古屋 NGO センターですと、実際に NGO の活動で現地に入ってきて、つい1カ月前や昨日帰ってきたなど、現地の情報を持っている人たちがいます。さらに、こういった国際理解教育を名古屋でやっているよということの全国的な発信を、それこそ JICA の機関誌の中などで全国的に展開できます。

NIED・国際理解教育センターは、国際理解教育の体系的な位置づけもでき、私たちがプログラムを作っていく中での監修機能も持っています。

このようにそれぞれの参加団体が強みを持っていて、それを生かしてセミナーに反映しているということです。

ただ、こういった協働をしていく中で、やはり各担当者の意識の違いというものも当然あります。組織ごとの仕事の進め方、意思決定方法が違います。まず、決定的に違うのは、やはり県の協会、市の協会、JICA などの行政系の団体と民間の NGO とは違います。地方へ行くと、県の機関と、政令指定都市や基礎自治体の機関が、仲良く一緒にいろいろな事業をやるというのは、なかなかない。最近はいよいよ変わってきましたけれども、それぞれが同じようなことをして、縄張り争いをしながらやっていくというケースもままあります。NGO の人たちは、

会議に意思決定を持っている人が参加しますが、行政系は、必ず持ち帰らなければいけないので、それぞれ組織の中で持ち帰って、検討と説得をしなければいけない。

逆に行政系の団体は、何でこんなに毎月会議をやって、何も決まらずお前は帰ってくるんだ、と担当者が聞かれる。ときには業を煮やした上司が会議に出てくることもある。実際にあったケースですが、そこに来た上司が逆に、今まで全く知らなかった国際理解教育や、参加型手法というようなものに目覚めて、理解を示していただいたという成功例もあります。

協働のメリットを挙げればいろいろあります。1機関ではなし得ない事業の広がりを持つこと。担当者間の顔の見える関係づくりができ、組織同士の信頼関係が構築できる。さらに、セミナー以外の国際理解教育やほかの事業においても、その信頼関係を基に協働していこうということで、「リソースマップ」を作っています。そこには各団体の連絡先などのほか、年間の国際理解教育のイベントスケジュール、学校や団体などへの講師の派遣案内などを記載しています。例えばスキルアップをしたい人は、JICAのやっているこの事業に参加をすればいいんだ、この事業は何月にあるんだということが一目で分かる。これは逆に担当者にとっても、それぞれの団体の役割分担が明確になって、この分野についてはほかの団体が主に事業をやっているので、地域全体のことを考えつつ、次にどこの部分が弱いのか、自分の組織がどこを補完するのかというような形で、それぞれの団体にとっても活動のヒントを得る資料になっています。

このセミナーにつながる展開としては、国際理解教育のネットワークの中で、こういった実行委員会で集まるのがひとつの場になってはいますが、これを経常的なワンストップセンターみたいなものにできないかというような検討にも入っています。さらに国際交流基金と名古屋国際センターで、アジア各国の漫画家による漫画を利用した教材の作成なども、このチームの協力を得て動いています。

◆ コーディネーターに求められる3つの役割

最後にコーディネーターについて触れます。前の3人の方は、いろいろ課題も出しましたが、私は、課題というよりはコーディネーターに求められる役割を考えてみたいと思います。私は国際交流協会の職員で、別にコーディネーターという職を背負っているわけではありません。職務がたまたま世間一般から見ると、コーディネーターに当たるかなと勝手に思っていて、ここに座っているのがいいのかどうかも、自問自答するところもあります。これからの話は、立場とは関係



しない個人的な考えだと思ってください。3つ挙げます。①鳥のように②虫のように③人として——です。

「鳥のように」というのは、大局観を持つこと。天からと言ってもよいのですが、やはり時代を読みつつ、地域課題を明らかにする。そして地域のリソースを見いだす。この視点は大きな前提として、コーディネーターは持っていないといけないのではないか。

そして「虫のように」というのは、自分の組織や能力をよく知らなければいけない。それから当然相手の組織や能力もよく知らなければいけない。それはつなぐ場合も一緒に協働する場合もそうです。そこで最良の翻訳者、通訳者として何を伝え、それをどう伝えるのか、そしてどうしたら伝わるのかという、ノウハウの部分をしっかり認識しなければいけない。例えば、ひとつ例を挙げれば、私たちのような県や市の協会は、出向の職員がいます。県の役人、市の役人、前職は国際交流とは全然関係ない仕事をやってきた人も来るわけです。この人たちをまず説得しなければいけない。そういったときに、プロパーの職員は非常に下手です。実は、行政の持つ基本方針の中に、自分たちがやりたいことが書かれていて、

この事業は、県なり市なりの基本方針のこの部分を具現化するものですよとキチンと説明すれば、理解が進み、決裁も通しやすい。でも、そうしたプロセスが不十分なまま、自分たちがやりたい、こうしたいといった部分を大きな声で言っても、それでは伝わらないということです。

3番目の「人として」ということですが、個人的にはまず、「会おう、動こう、汗かこう」ということで、現場を重視しています。机の上ではコーディネーターは何もできないので、ここはやはり実践しなきゃいけないということです。あと「信頼しよう、任せよう」。最初いろいろやると、行政系の人は、「大丈夫か、任せていいのか、本当に大丈夫なのか」といったことを、しつこいほど言います。この人が3年たって異動して新しい人が来ると、また同じことを言いますが、そこは中で説得する。ただ、そうはしていても何事もすべてうまくいくわけではないので、打たれ強く何度でも説得する。そして人間関係を築いて、また説得する。そして、やはり大事なことは、最初の「鳥のように」の大局観を持って、なぜこれをやるのかを確認して、ブレないことです。ブレなければ、そのときは駄目でも来年はできるかもしれない。あの人はいつも毎年同じことを言っているという姿勢は、必ず伝わっていくと思います。

◆ 質疑応答

山西 丹下さんからは、「鳥であり、虫であり、人であり」という、詩的な表現で役割論的なものまでも組み入れていただきました。

先ほども言いましたように、第1部の目的は、それぞれの異なる分野で活動中の4人に今コーディネーターとしてどういう仕事をしているか、その仕事を通して

浮かび上がる課題を改めて確認するということです。これだけの人が一堂に会して語り合うというのは、めったにあることではないものですから、やはりその時間と空間を大切にしたいと思います。ここでの皆さんからのご質問は、それぞれの現状、課題に絞っていただきたいと思っています。コーディネーターの役割論や専門性については、第2



部でお願いします。

先に質問をいただき、4人には一括して答えていただくようにしたいと思います。

質問者① 宮村さんにおうかがいします。教育コーディネーターが扱う分野が小中学校で情報、環境、スポーツなどあらゆる分野があるということでしたが、例えば国際理解や国際交流ということを取り上げたときにはこうやったんだ、というふうな説明をいただけたらありがたいと思います。

質問者② 神奈川県相模原市で教育コーディネーターをやっております。宮村さんと宮崎さんにお尋ねしますが、どういう経緯でコーディネーターになられたのかということと、現在、実際にコーディネーターをやっているって、その仕事の内容と、実際に自分が置かれている身分が保障されているかというようなことを、おうかがいします。

質問者③ 三重県四日市市の国際交流協会にいます。宮崎さんがおっしゃったように、高いレベルの日本語を習得しようという方が増えてきているような気がします。ただ四日市市はブラジル人が、外国人の登録者数の約4割いて、それも1カ所に集中して3,000人くらいがいるという状態の中で、日本語を勉強しようというインセンティブがなかなか働かない状況にあります。いかにしてその人たちに日本語を教えるかということを考えなければいけないと思っていますが、国際交流協会がやっている方向は少しズレていて、実際に来ているのはもう少しレベルの高い人。四日市の国際交流協会は、県や市と密接に関係のある財団法人ですけども、そういった高いレベルの日本語を教えることに対して、果たしてこれは民間の日本語学校との競合を含めて、役割をどういうふうに考えていったらいいのか、自分の中でも疑問に感じておりますので、その辺のお考えをお持ちでしたら、教えていただきたいと思います。

宮村 国際理解に関する仕事についてですが、まず社会資源を集めるということですが、例えば、私には外国人の友達などがいます。また、いろいろな組織、国際絡みの団体やインターネットの手段などにより、情報を蓄積しています。もちろん限度はあります。その次のステップとして、ニーズを把握するというのですが、ハッキリしていないものも多いので、詳しく先生方にうかがいます。先生にも具体的なイメージがあるわけではなく、ネイティブの英語を話す人が以前には来てくれた、といったようなお話をされる場合もあります。国際理解イコール英語活動というような意識をお持ちの先生方も多いです。そんな中、先生方とお話をする中で、ねらいをハッキリさせていくのですが、ねらいが最終段階でやっ

と確定したりするときもあります。

ニーズを把握した上で、マッチングを行います。例えば英語の先生を、というようなオーダーが来たとしても、ネイティブの先生なのか、日本人の先生なのか、どのような方法で活動を行いたいのか、さまざまな想定をされる「人」がおりますので、そこも少し具体化させます。また杉並区で決まったサポーター予算の中で受けてくれる方を見つけるというような条件も入ってきますので、意識のマッチング、条件のマッチング、日程のマッチングというようなことを行っていきます。

授業プログラムを作っていく際には、コミュニケーションによって方向を確定させていきながら、方法やアプローチのズレを解消するようにしています。

教育コーディネーターになった経緯に関しましては、実は私は、専門学校で英会話の講師もしています。その授業の中で、生徒のやる気をいかに引き出す授業をつくることができるかということで、いろいろ試行錯誤していた中、外国人の友人に授業にゲストティーチャーとして来てもらい、授業をつくっていくということもしてきました。つまり、教員兼コーディネーターをやっていたという感じでした。このような授業をつくっていくことは自分自身もとても面白く、また生徒にもとても効果的でした。そういうわけで、専門学校でやってきたことと似ているので、この学校教育コーディネーターの仕事にも興味を持ったというわけでした。

それから身分の保障についてなんですけど、これは本当に私もとても難しく感じております。こちらの小学校からはこれくらい求められて、こちらの中学校からもこれくらい求められて、職員のような感じで求められても、身が持ちません。かかわればエンドレスにかかわれますので、自分の生活と、自分のほかの仕事と、コーディネーターの仕事のスタンスにいつも悩まされております。

宮崎 身分保障ということですけども、これは私たちの契約書に書かれている条項があって、とても幸いなことに、確かにエンドレスではあるのですが、ある意味ではここからここまでということ、その線引きは自分がしようと思えばできることだと思います。ただ、やはりたぶん線引きしたくないのではないかと思います。ですからやはりエンドレスの世界にいるのだと思いますが、身分保障というのはそういうことでしょうか。

質問者② 給与のようなものは？

宮崎 それも契約書にちゃんと書かれていまして、年契約でいただくものもいただいています。

それから経緯ということですが、私は13年くらいMIAの会員をしています。

ひとつは長いということ、それからたぶん声大きいということ、そして、私がこのMIAの活動の中で、市民活動というものに目覚めるということと大きいですけれども、興味・関心を覚えるようになったことで、いろいろと意見を持つようになったこと、そういうことが今の日本語学習支援コーディネーターに結びついたのではないかと思います。

それから四日市の方のご質問ですが、確かに高いレベルの方が日本語をもっと習得したければ、それは民間の日本語学校に行けばいい、そこまで行政がサービスしなくてもいいという意見をお持ちの方もたくさんいらっしゃるし、私たちもよくそういうことは議論します。ただ、私たちMIAが求めているのは、日本語習得というのは副産物であって、人間関係をまずつくる、こちらの方が主なんです。人間関係をつくることの中から、そのとき、言語は何語でやるかといったら日本語でやるわけですから、副産物として日本語が身につくというふうに考えています。そして、たとえその方たちが廉価でイーザーに日本語学習ができると思って、喜んで来てくださるとしても、私たちはやはりどこかですり替えをしたいと思っています。その方たちが日本語学習をすることは、もともとの目的はそこではなくて、社会参加だったんだというふうに、どこかでいつか気がついてくださることもあるかもしれない。「社会づくり」に参加している、という意識を持ってくれる、そういう活動だと私は思っています。

山西 司会があまり多く発言することには問題がありますが、これまでの話で、やはり協働という言葉が出てきていますが、キーワードかなという感じがします。協働というのは、やはりともにお互いが生かされていくということであるのに対し、いろいろな活動報告をお聞きすると、コーディネーターが入ることによって、コーディネーターに依存していくという現状が結構見えてきます。学校教育の現場は比較的その傾向が強いと思います。ボランティアセンターの活動の中でも、その人たちが動けば動くほど、一部の人たちは仕事が楽になっていって、逆にその人たちに仕事がのっかかっていくという状況を見ると、これは何なんだろうかと疑問に思うことがたびたびあります。でも、協働というのはお互いが生きるといふ点からは、時には非常にダイナミックな厳しい関係をどうつくるかということも必要で、これはコーディネーターのとらえ方の問題でもあると感じています。

今日のお話の中で、皆さんそれぞれが、誰がどう動いているのかということが少し浮かび上がってきたかと思いますので、それをベースに第2部ではコーディネーターの専門性について議論を深めていきたいと思っています。